
Two The Alice

緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Two The Alice

【Nコード】

N7537X

【作者名】

緋色

【あらすじ】

小さい頃、突然目の前に現れた純白の少女。
少女は「アリス」と名乗り、そして消えた。

そして、年月が流れ、13歳の春。
学校で突然倒れてしまう紅常くわんじょう 藍あい
その夢に出てきたのは小さい頃に目の前に現れた少女「アリス」だった。

アリスに頼まれ、記憶探しを手伝うことになった藍。

そこから、段々と複雑な事に巻き込まれながらも藍にも変化が現れ始める

そんな純白の少女と平凡な少女の記憶探しのお話。

序章

短い悲鳴が口から漏れた。

少女は、自分の目を疑うことしか出来なかった。

白い、純白の少女が目の前に突然降り立った。

そして彼女はこう言った。

『私は、アリス』

そういうとアリスはまた何処かへ行ってしまった。

それがもう何歳の時で、どれくらいの年月が流れたか覚えていない。

記憶も薄れ掛けており、夢だったのかと思い込む程現実的ではなかった。

ただ、覚えていることは黒が一点もない純白の少女から目が離せなかった。

そして数年の時が経ち、その時の光景が夢に映し出されるようになった。最初は年に数回。次は数ヶ月に一回、次に一ヶ月に一回。

そしてとうとう、毎日その夢を見るようになった。

それほど印象が強かったのだろうか？ なにかの病気か？

ただ、その夢に意味があるなんて思いもしなかった。

その夢が自分の未来に影響があるなんて思いもしなかった。

紅常くわんとこ 藍あいはただその中心点にいる事を認められた存在だったに過ぎない。

これは、誰かに仕組まれた滑稽な御伽話だったんだ

咲き出す華

いつもと同じ夢を見て目が覚める。

今日の夢はやけに鮮明だった。いつもぼやけている顔が後もう少しで見えるくらいに。

ベッドから上半身を起こす。時計を見ると目覚ましが鳴る五分前。目覚ましをOFFにしてから階段を下りてると朝ご飯らしき匂いが漂ってくる。ドアを開けてリビングに入ると丁度長男の蒼そうがテーブルに朝ご飯を並べている。

母は生まれる前に他界し、父はつい5年ほど前に外国へ転勤した。だからなんとか兄妹4人で生活している。でも、それもあまり大変でもなかった。

長男の蒼は高校生になっていたし、次男と長女はすでに中学生。生活に必要な知識はある。元々両親は共働きだったためご飯や家事は出来るように育てられて来た。

「あ、今日は早いね。いつもは二度寝するのに」

微笑みながら蒼が話しかけてきて藍は思わず苦笑いを返す。綺麗な顔立ちをしているのに微笑まれるとさらに綺麗に見える。大学でもモテていると情報網の姉に聞いたことはあったが妹ながらやけに納得してしまっ。

席に座って朝食を食べようとした時、再びドアの開く音が聞こえる。

「おはよー」

「……………」

眠そうに目をこすりながら最初に入ってきたのは長女の真紅^{しんく}。次に全然眠そうじゃなく、無言で入ってきたのは次男の紫音^{しおん}。

真紅はサイドテーブルに伏せて二度寝しようとしている。紫音がそれを起こそうと揺さぶっている。

「起きろ。蒼が怒る。今のうちに起きとくのが身のためだ」

紫音はそれだけいうと自分の席について朝食を食べようとする。

藍と紫音があいさつを交わして黙々とご飯を食べていると蒼は自分の席から立ち上がり真紅の方に向かう。藍と紫音はそれを目で追う。

すると突然真紅はガバツッと顔を上げておそるおそる横を見るとすぐ近くに蒼の顔がある。かすかに黒いオーラーが漂っている。

真紅の目線にあわせるため蒼はかがんでいる。真紅は渋々フラフラと眠そうに立ち上がり自分の席に座って手を合わせた。

「今日から藍は中学生だよね」

「うん」

真紅はパンに蒼お手製の手作りジャムを塗りながら藍に問いかける。

今は4月。新学期の季節。そして今日から学校。蒼は大学2年、真紅は高校1年になり紫音は高校3年。

藍は今日から一人ではなく兄妹揃って通えるのだ。

藍達が通っている学校は中・高・大繋がっている私立だ。それぞれ校舎は橋によって繋がっているので学年が違おうと交流も多い。

「蒼兄は今日から地獄の始まりなんじゃないの？」

真紅が笑いながら少し面倒くさそうな顔をしている蒼に言う。

「それは・・・真紅を起こす事にたいして？」

「今更だね、違うよ。また女子達が寄ってくるよ。大学生の中で付き合いたい男子の上位でしょ？」

「真紅、なんでお前は大学の情報を知っているんだ？」

今まで黙々と食べていた紫音が疑問を述べた。

「交流場とか」

藍達が通う私立紅葉ヶ原大附属は中・高・大学生が交流出来る場があり、休み時間や放課後はいつも賑わっている。

真紅は生まれながらに高い社交性を持ち合わせているため人とすぐに仲良くなれる。それが年上であるうが年下であるうが関係ない。

「蒼兄はいつも交流場にいる女子大生の話の中心によくいるんだよ」

「へえ、蒼兄さんってすごいんだね・・・」

藍は紅茶をすすりながら蒼を見る。

「でもだからこそ蒼兄は交流場には一回も来たことないよね」

「当たり前だ。すごいことになるぞ」

紫音は淡々と言う。蒼は苦笑しながらそうだねと小さく答えた。

「藍、それどうしたんだ？」

「へ？」

蒼は真紅の話を真剣に聞いている藍に問いかけた。

「それって？」

藍は問いかけられた意味が分からずに聞き返すと蒼は胸の辺りを指差す。藍は自分の胸の辺りをみる。

そこにはパジャマから見え隠れするひとつの紅色の紋章がある。見たことのない刻印。

「なんだろうね・・・痣かな？」

血みたいに赤い刻印をなぞって見る。彫られたような感触もない。

「まあ気にすることないと思う。痛くもないし」

藍はそれだけ言うと立ち上がって洗面所へ行くために部屋を出る。

鏡に映っている自分をまじましと見つめる。確かに胸に痣がある。ただ、痣と言いつつも気味の悪いくらいにちゃんとした形を成している。藍の知る限り昨日寝る前まではなかった。

「ん……………」

藍はもう気にすることをやめて顔を洗い歯磨きを済ませる。着替えるために自室へ向かう途中に真紅と出会う。

「藍。休み時間ってなんかしてることあるの？」

「……………小学校の時は特になにもしないでボーっとしてたよ？」

「じゃあ交流所に来なよ！ 私は絶対いるし、友達も藍に会いたいわって言うんだ」

突然自分の知らないところで自分の話題が出ていることを今初めて知って顔が少し赤くなる。

「な……………なんで私のこと知ってるの？」

「私が話してるし、藍と同じ小学校に兄弟持つてる人は結構藍のこと知ってるよ」

なんで自分の話をするのか分からず思わず自分の姉を睨んでしまふ。すると今度こそは顔が火照るようになっている。真紅の口から告げられる。

「で、美人っていう噂が交流場の一部で流行ってる」

「っ!?!」

悲鳴こそは上げないが一瞬真紅を殴りたくなった。藍は小さい頃から美形な兄と美人な姉に囲まれ過ぎしてきた。自分だけ唯一美人ではないことにコンプレックスを抱きながらも育ってきた。

「ちよっ・・・姉さんの方が美人なのになんで私の話題なんか・・・私なんか美人じゃないよ」

階段を上り始める真紅に必死に講義する。真紅は笑いながら階段を上りその後を藍が追う。

「藍は美人だよ。小さい頃はどこにでもいる普通の子だなあ〜なんて思ってたけど、歳を重ねるごとに綺麗になってくし」

実際ビックリしたよと真紅は言つと自分の自室に入っていった。

「・・・・・・・・」

藍は少し固まる。さっきの真紅の言葉がグルグルと頭の中で回り、また体が火照る。すると突然肩を叩かれまた硬直してしまふ。後ろをゆっくりと振り返ると紫音が立ってた。

「真紅の言つとおりだ」

それだけ言つと紫音もまた自分の自室へ入る。藍はどうしたらいいか分からなくなり自室へ行って着替えることにした。

入学式が金曜日であり、土日は喜んで月曜日である今日が初めての授業だ。

春休みの間に紫音にしごかれつつ復習と予習を終えたため人より少しは出来る自信がある。いや、元々自信過剰の人じゃなくとも紫音に勉強を教えられたのなら誰でもそう思う。紫音が作った問題集を出来るようになれば確実に人よりは出来るほうになる。それは藍に限ったことじゃなく、真紅も同様だ。紫音の教え方は上手く誰でも確実に勉強が出来るようになるだろう。蒼も教え方は上手いが大學生のために色々忙しいらしく教える時間がないらしい。だが紫音は蒼にしごかれたらしい。

中等部の制服と高等部の制服は少ししか変わらない。セーラー服に入っている線の数だ。中部は2本線が入っているが、高等部は3本入っている。それ以外は一緒だ、赤のリボンに上は白。スカートは膝までの紺。

だが、真紅によると、ほとんどの人は校則違反で丈を短くしている。一年ではそれほどいないが入学式の時からすでに丈が短い人もいた。きつと半年も経ったら一年も校則違反だらけになるだろう。

自分だけはそうなりたくないと思いつながら着替えを済まし一階へ下りるとコーヒーを啜りながら新聞を読んでいる蒼がいる。

藍はなぜかそこだけが別次元のように思えた。背景にまるで薔薇が見えそうなの……

「……ねえ蒼兄さん、今日って何時に起きたの？」

今思えば生まれてからこの13年間一度も蒼が何時に起きていたか聞いたことがなかった藍。別に気にならなかつただけなのだが、今はなんとなく聞きたくなつた。誰よりも早く起きて、誰よりも遅く寝て、朝ご飯の準備も、着替えも全て終わらせている。

一時間くらいかかる作業を藍達が起きてくる前に終わっている蒼。長男とはいえ凄いと思う。

「なんだ、イキナリ。今までそんな事聞いてきたことないのに……」

「ん、なんとなくね」

藍は自分の席について目の前に用意されている紅茶を飲む。藍だけの分ではなく、藍・真紅の席には紅茶、紫音の席にはコーヒート毎朝藍たちが着替えを済ませて下に下りてくるまでには必ず用意されている飲み物。

こんなに優しい兄がいるのは幸せだと思う。

「そうだな……今日は5時だが毎日によって違うな……4時の時もあるしな……」

「へえ……」

「そういう藍は今日早かつたけど」

「ああ……なんか知らないけど目が覚めた」

今朝見た夢が原因だろう。紅茶を飲み終えてキッチンへ運ぶ。制

服に着替えた紫音がリビングへ入ってくる。

「コーヒーに砂糖を入れずに無言で飲み続ける。」

「真紅姉さん遅いなあ……」

「また寝ているんだろう。気にする必要はない」

着替えている最中にどう寝るのか気になる。だがそれよりもまた寝ると遅刻する可能性がある。

「起こしてくる」

藍は立ち上がりまた上へ上がった。

真紅の部屋の前で立ち止まりドアをノックする。反応はない。ゆっくりあけると案の定ベッドに制服のまま寝転がっている真紅がいた。

静かに寝息をたてている。

激しく揺すぶると唸りながら細く目を開ける。

「…藍？」

「そつだよ。また寝ちゃったんでしょう？起きなよ」

大きな欠伸を一つこぼして立ち上がる。藍はふいに真紅のスカートの間を見た。

「真紅姉さんはスカートの丈短くしてるの？」

「ああ、これ？ん、まあたまに短くするかな……」

次は自分の番だともいうように藍のスカートの丈を見た……が、

「藍…それは長すぎじゃない？」

校則では膝にかかるかかからないかでいいのだが藍は膝下5？だった。

藍は昔から以上に足を見せるのを嫌がった。家では靴下が嫌いだからといって脱いでいるが、人前では嫌がり丈の長いスカートを好んで穿いていた。

「別に、これでもいいでしょ？」

「別にいいけど、いないと思うよ。そんなに長い生徒」

「いなくてもいいよ。いてほしいって思ってるわけじゃないし」

もう少し長い靴下を履いてしまえばタイツと思われるも仕方ないだろう。学校の校則でタイツは禁止なのでそんなことはないだろうけど。

そんな事を云々話していると下から声が聞こえた。

「藍ー、真紅はー？」

「あ、起きた。起きたよ！」

蒼が遅かった藍に大声で聞いてきた。藍はその声に大声で返事をする。

「そろそろ家を出る時間ね。行こうか」

「うん」

藍と真紅は揃って下の階へ下りると紫音と蒼が玄関で靴を履いている最中だった。

「ほら、早く行くぞ」

「真紅、そろそろ眠り癖を直したほうが身のためだ」

紫音が目を伏せながらいつものように淡々という。

「もう慣れたけどね」

藍と蒼が同時に声を発した。

「……慣れとは恐ろしいものだな。行くぞ」

4人揃って歩くとやはり目立つ。近所の人達はいさつしてくる。学校に近づくとつれて同じ学校の人達も増えてきて、蒼や紫音の同級生の女子などはずっと見ている。これで女癖が悪かったらきつと最悪だろう。同性にも人気がなかったらそつとうの恨みを買っただろう。

小さい頃から通り過ぎたものが振り返るほどモテているのに嫉妬と憎悪などを買わずに過ごしてきているのが奇跡なくらい。

藍は自分だけが惨めなような気がしてきた。小さい頃は一緒にいてもさほど気にもしていなかったが美人な兄妹と一緒にいて自分だけが美人じゃない。自分だけ普通。美人になりたいわけではないが、人間というのは人と人とを比べるようなものだ。

こんな美人な兄達と比べられては堪ったものじゃない。

藍はいつの頃からか薄々気付いていた。自分の中の黒い感情に、自分は醜い。別に兄達が嫌いなわけではない、むしろ好きだ。

優しく、末っ子だからといっていつも気遣ってくれる。だが、それがたまに憐れんでいるのか蔑んでいるのかと思ってしまう。そんなわけないと分かっているのに……

「よう蒼。相変わらずの人気だな」

ブーツと上を見ていると突然兄の名を呼ぶ男の声が聞こえた。蒼のほうをみると一度だけ見たことのある顔だ。確か一度だけ蒼の友達が5人ほど突然押しかけて来た時があった。その時の一人だ。名前は確か：鷹津^{たかつ}麗貴^{れいき}。母がドイツ人で父が日本人のハーフだと聞いた。

そのせいか蒼に負けず劣らず綺麗な顔をしている。今まで生きてきた中で分かったことは、蒼はクラスであまり浮かないように自分と同じような顔立ちや、美形な人と友人になったりしている。自分で美人だと分かっている、なんて人に言えばうらまれるだろうが生きてきてずっと女子に囲まれながら生きてきたのだ、気付かないほうがどうかしている。

それに類は友を呼ぶということわざがある。きつと放つて置いても集まるんじゃないだろうか。その証拠に紫音と真紅の周りも美人などが多い。紫音の場合は一人でいるのを好むためか一人でいることが多いが、真紅はよく友達を家に呼ぶことがある。そのために真紅の友達と顔見知りの人がいる。だが呼ぶ人はいつも同じなので顔見知りといっても数人しかいない。

藍は今日、一から友達作りとなる。小学校から一緒な子は一人しかいないため、友達は皆無と言っても過言ではない。

小学校の頃から一緒の子が藍にとっては唯一無二の親友だったのに安堵した。その子と学校は離れるとなんて考えるだけでも嫌だ。

小学校で初めて話しかけてきた子もその子で、親友と初めて呼んでくれたのもその子だった。

「あゝい!?!」

「っ!?!」

変な声が出そうなのをなんとかこらえて後ろから飛びついてきた親友を見る。

「藍はなんか後ろから見てもわかる。藍です! って感じのオーラーが漂ってるもん」

「……どんなオーラー?」

親友の魅羅之みらいの詩音。兄の紫音と同じ名前と読み方が一緒ということ親しみやすかった。詩音も緋色の兄の名前が紫音と知ったと

きに同じく親近感が湧いたらしい。

「詩音、髪の毛切っちゃったの？」

詩音は小学校の時までは黒い艶やかな髪を腰まで伸ばしていたのだが今はそれが嘘のように肩までに切ってしまったってセミロングだ。

長い髪が少し前から鬱陶しく思っていたらしく、親にもそろそろ切りなさいと五月蠅かったという。

「もったいないな……」

「そうかな？あ、真紅さん、おはようございます」

「おっはよー。髪切っちゃったんだね。吃驚だよ」

「真紅さんはまた伸びましたね」

真紅は赤みかかった髪を太腿まで伸ばしており、いつもツインテールかポニーテールに結んでいる。

その姿には緋色達の母の面影が重なる。だが、藍の髪の毛は濃い紫色。父にも母にも全く似ていない。

生まれたときから一度も似ていると言われた事が一回も無い。蒼の髪の毛はブルーブラックで腰の少し上まであり毎日低めのところの一つにまとめている。髪は父似で顔立ちは母似、紫音は黒髪で父似。両親ともに美人だった。藍はいわゆる失敗作。

藍は真紅の言った通り美人になってきているのを自覚していない。そしてしようもしない。

「詩音ちゃんは休み時間何もしないなら藍と一緒に交流場に来なよ！」

「ああ、勿論そのつもりです。藍も行くんでしょ？」

「え…まあ、姉さんにも誘われたし…」

「じゃあ決定。休み時間に行きますね！」

相も変わらず真紅と詩音は仲がいい。同級生かのようにだ。

藍はそんな今の状況が心地よいと思っていた。なんの問題もなく、親友が姉と仲が良くても自分にもちゃんと対等に接してくれる。兄達にコンプレックスを抱きながらも幸せな日常。

そんな当たり前の日常が好きだった。そんなことを、後になって考える。

「じゃあ中等部はこつちだから。藍、行く？」

「うん。じゃあ後でね、姉さん」

蒼達とはつきさつきまでいたが友達らしき人に連れられ私達を置いて行ってしまった。

やはり友達にも人気なのだと思うと自分のことのように嬉しくなる。誰にでも好かれる人気者。そんな兄が誇らしい。だが、それとともにコンプレックスは大きくなる一方だ。

姉さんも雰囲気盛り上げるムードメーカーとして好かれやすく、紫音も一人を好むとはいえ人に頼られるタイプのせいがよく話しかけられている。

そんな完璧な兄達を持ちつつ自分はなんだろう…と。

平凡で、真紅のように美人でもなく、友達も人並み以下だ。そんな自分が嫌いかと言われたらそうでもなかった。そんなことでさえ心地いいと思える日常の一部だった。

「ねえ藍。顔色悪いよ？」

「え？」

不意に詩音に言われ我に返る。確かに少し気だるい。

「多分…大丈夫」

「多分で…先生に言っとくから体温だけでも測ってきなよ」

「ん……」

足元がふらつきながら保健室へ向かう。

そんな藍を見ながら我慢できなくなった詩音は近くにいたクラスメイトに藍と保健室へ行くことを手短かに伝え、藍に付き添って保健室へ行くことにした。

「本当に大丈夫？」

「うん」

つい校門の前までいつも通り普通で健康だったのに、突然の吐き気とけだるさ。

なにか違和感がある。そんな感覚。

「ちよっ……藍!？」

「……ん」

目の前が真っ暗になる感覚が一気に襲いかかる。

そんな暗闇の中に、一筋の光。それに必死に手を伸ばすが後少しというのに届かない。それがもどかしく必死に必死に手を伸ばす。

そして、やっと届いたと思うと視界が開いた。

「……」

見たことのない天井。だがアルコールの匂いでここが保健室の休養室だということは分かった。

シーンと静まり返った休養室。ゆっくりとベッドから降りて休養室から保健室へと出る。そこもまたシーンと静まり返っており保険医が一人たたずんでいた。

「あの……」

恐る恐る声をかける。後ろ姿からして男の人。男の保険医は初めてみた。

そんなことをボーっと考えていると保険医がこっちを向く。

「ああ、やっと起きたね」

男の保険医は初めて……だが、こんな美人な先生も初めて見た。蒼にも紫音にも負けず劣らず整った顔立ちをしている。こんな先生がいていいのか……休み時間には女子が殺到していそうだが、多分見慣れているせいかなよりは反応が薄いはずだ。

「あの、私どれくらい寝てました」

「今は二時間目の途中かな？調子はどうだい？」

「大丈夫です」

そこにある椅子に腰をかけるよう促され素直に座ると体温計を渡される。

さっきの記憶を辿る。そうだ、自分は保健室に向かう途中倒れたんだと思う。突然ふら付いて……

「にしても君は珍しい」

「なにがですか？」

先生が笑いながら話しかけてきた。

「私を見てそんなに反応が薄い女子を初めて見たよ」

「それ自分が美形の部類って認めているんですよね？」

「自信過剰と思われようとも小さいころからずっとそうだったんだ。気付かないほうもどうかしている」

この人は自分と同じ考えをしていると感じた。兄達に抱いている考えと一緒に。

「それは、同感です」

「で、君の近くには私と同じような人がいるのかな？」

「はい。兄二人と姉一人が…美人で……だからそういう部類の人には慣れていきます」

三人の顔を頭に浮かべる。両親に似ている自分の兄妹。よく、近所の人から似ていないねと言われてきた自分。

別に今更どう思うこともないが。

「……そうか。自己紹介が遅れた。私は葛原 優。ここの保険医をしている。よろしく」

「はい。私は…紅常 藍といます。よろしくお願いします」

小さく頭を下げる。すると体温計が鳴ったので取って体温を見る。

「37.1」

「微熱だね……また倒れても困るし今日は早退でもするかい？」

「あ……」

いいですと言いかけて口をつぐむ。今はどうもないがまた突然しんどくなって周りに迷惑をかけてしまう。それを考えると早退するのが得策なんだろう。

小さく頷く。

「家に家族は？」

「いません」

「じゃあ携帯電話の番号わかるかな？」

力なく横に頭を振る。

嫌だ……

父の顔が頭を横切る。

キモチワルイ

さっきの吐き気や、しんどい、けだるさ。それとはまた違う。

「……じゃあお兄さんに言ってから車で送る。また道端であおられ
ては困るしね……」

「…はい」

小さく答える。

藍は父が嫌いだ。しかし生みの親に対してそんな感情を抱くことに罪悪感など湧かなかった。

「……………」

今、誰かに呼ばれた？

かすかに「藍」と呼ばれたような気がした。とてもか細くて、少女の綺麗な声。

空耳かもしれないが聞き違いだろう。そう思い顔を俯かせる。しんどい……………

先生が保健室を出て行ってから数分経つ。大学の校舎から中学の校舎までは5分もかからないが真ん中に高校の校舎があるためか少しの時間はかかる。多分職員室から大学の方へ電話かなにかで連絡するのだろう。

校舎から校舎へと繋がっている橋を渡って校舎を行き来する、交流所もそうやって行くのだが。

今は授業中だ。蒼は真面目なためよっぽどの事がないと講義を抜けてこないだろう。やはり迷惑だっただろうか……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7537x/>

Two The Alice

2011年10月20日03時02分発行